『正法眼蔵』「仏性」巻における〝衆生〟の語について

岩永正晴

一、はじめに

道元禅師の主著である『正法眼蔵』の七十五巻本と十二巻本とに重複する巻はないが、内容に関連の見られる巻がある。それらの巻の比較を通して両編集の性格を知ることはできないかと考え、その初めとして、所謂「発無上心」巻と「発菩提心」巻とを及り上げ、第三十八回宗学大会では「「発菩提心」巻について―「発無上心」巻との比較（一）―」と題して、「発無上心」巻の内容について発表し、また九二年度大学院仏教学研究会第一回定例研究発表会では、同じ表題の（二）として、「発無上心」巻で菩提心をおこすとされている〝心（仮に木石心と呼んだ）〟と、「発菩提心」巻で菩提心をおこすとされている〝慮知心〟とを比較し、発表した。[1]

本稿ではこれらを受け、特に慮知心を取り上げ考察したところを述べたい。結論にまでは至っておらず、あくまで途中経過の報告ではあるが、御教示を賜れば幸いである。

二、問題の所在

1、問題

さて本稿で筆者が問題とするのは、慮知心である訳だが、はじめにこの慮知心を問題とする理由を述べておこう。

本学講師、角田泰隆氏の業績には道元禅師における心を巡っての一連の論文がある。その内、論文「道元禅師における心解釈考」[2]で、心の解釈についての研究の成果を、次のように纏められている。

……以上、五点について述べたのであるが、これをまとめるならば、心をいかに解釈すべきか、については、

（1）全界・全時・全存在・全現象、また、あらゆる活動・変化・要素等、総てが心であり、心以外のものはない、のであり、心をいかに解釈してはならないか、については、

（2）形而上学的事象を指して心としてはならない。（教外に特別なる伝附があるとし、それを心と称することの否定）

（3）観念論的心と解釈してはならない。（念起の所産として外境が存在する、という見解における念起を指して心とすることの否定）

（4）霊知（霊性）をさして心というのではない。（身心隔別・心常相滅の見地に立つ心の否定）

（5）衆生凡夫の煩悩妄想そのままのこころを心というのではない。（安易な現実肯定の否定）

ということになる。これが『正法眼蔵』における心解釈の概要である。ここで重要なのは（1）である。（2）（3）（4）は、観点をかえれば、何か一物を指して心と言うことの非なることを示されたものであるとも言えるから、（1）であるからには必ず（2）（3）（4）でなければならないのである。また、（5）については、後述するように、（1）が本証妙修の立場においてこそ説かれ得るものであるからには、当然（5）を言わねばならないわけである。畢竟、これら五項目は一貫した立場を持つのであって、このことから『正法眼蔵』における心が、延いては道元禅における心が、一貫した思想の上に説かれていることが知られるのである。[3]

角田氏が自ら纏められたところは以上であるが、これを単純に見ると、（1）の主張と（5）の主張は矛盾している。全界・全時・全存在・全現象、また、あらゆる活動・変化・要素等、総てが「心」であり、「心」以外のものはないのであるならば、ある存在のこころのはたらきも「心」でなければならない筈だからである。この点についてのお考えはこの纏めの前にある論証の部分を見てみると明らかとなる。

……また、『即心是仏』巻に次の説示がある。

h　いはゆる即心の話を聞きて、癡人おもはくは、衆生の慮知念覚の未発菩提心なるを、すなはち仏とすとおもへり、これはかつて正師にあはざるによりてなり。（『即心是仏』巻四二頁）

これは「即心是仏」の心の解釈について述べたものである。心とは慮知念覚のことではないというように理解され、このことは前記の（e）と矛盾するかのようであるが、そうではない。なぜなら、「衆生の」或いは「未発菩提心なるを」という語を伴っていることに注目してみると、同巻にて示されている、

i　いまだ発心・修行・菩提・涅槃せざるは、即心是仏にあらず（『即心是仏』巻四二頁）

という説示と照合するにおいても、非とされているのは「衆生のこころ」であり「未発菩提心なるこころ」であると受取れるからである。即ち、仏道修行とは無縁の、衆生凡夫の煩悩妄想そのままのこころを心というのではなく、また、これがそのまま仏であるとするような安易な現実肯定を厳しく否定されるのである。[4]

ここで「このことは前記の（e）と矛盾するかのようであるが」と断っておられるのは説心説性巻における、

心はひとへに慮知念覚なりとしりて、慮知念覚も心なることを学せざることによりて、かくのごとくいふ。[5]

との説示を引いて、所謂「こころ」も心であることを論証さ

れている部分である。

さて、このように、凡夫の煩悩妄想そのままのこころは、「心」とは言えず、仏道修行に励んでいる者のこころこそが「心」である、つまり、発心以前のこころは全く煩悩妄想であって肯定されず、発心以後のこころのみを禅師の言われる「心」だとされているのである。これは、榑林皓道博士がその著書『道元禅の研究』で、

……それゆえ仏教では「ある心」を妄心、「あるべき心」を真心となし、その現実化をはかる。そしていかなるものも真心を生まれながら本具するとの前提にたち、染汚の妄心を捨遣払拭して、本具清浄の真心還皈すべきことを強調するが、しかし禅修行においては、妄心の処理よりも本具真心の自覚に重点をおき、心源（真源）を究めることによって、妄心の自然解消をはかる、という建前である。心宗（禅）にける成仏とは心源の究明に外ならぬからでる。道元禅師における心は、例外なく、いつも真心であることは注意さるべきである。[6]

と述べられる心解釈の枠組みに則ったものである。そのことは、角田氏の論文「『正法眼蔵』における心について」[7]でこの一節を引いて積極的に肯定されているところから明らかである。氏はこのように、心を真心と妄心とに分け、妄心を否定し、真心のみを禅師の心とした上で、「発菩提心のところに心が現成すると明言したい」[8]と述べられている。

また、角田氏はさらに、同論文の「五、おわりに」の部分で禅師の「心」について次のように纏められている。

道元禅師における「心」が本証妙修の立場より説かれていることは、注目されるべきである。先に論じたように、発菩提心とともに「心」が現成するというのは、結局、修行とともに「心」が現成するということであり、修行なくしては「心」は現れないのである。発心・修行・菩提・涅槃という行持道環の妙修によってこそ、尽界尽時が「心」として現成するという本証の現成があるのである。[9]

これをみると、尽界尽時が「心」であることが本証の意味である、本証は妙修によって現成する、発心以前の衆生にとってみれば、自己は本証のそとにある、というお考えであるとみてよいと思われる。しかし、身心一如（後述）を主張し、身心あるいは依正二報の現成を生の全機現とみる禅師において、このような心についての解釈が妥当なものであるかどうか、疑問のもたれるところではある。

さて、以上のような角田氏の心解釈があると知った上で、慮知心を取り上げ問題としようとする理由を「即心是仏」巻における禅師の所説をとおして以下に述よう。

「即心是仏」巻では、冒頭、諸仏諸祖が保任してきたのは即心是仏だけなのだと述べられ、次は角田氏も引かれていたところであるが、

いはゆる即心の話をききて、癡人おもわくは、衆生の慮知念覚の未発菩提なるを、すなはち仏とすとおもへり。これはかつて

正師にあはざるによりてなり。[10]

と示され、菩提心をおこしていない衆生のこころを仏とすることが否定されている。こころは、感覚・認識などのはたらきであるからそれを仏としてしまうと、次に、

外道のたぐひとなるといふは、西天竺国に外道あり、先尼となづく。（中略）いはゆる、苦楽をわきまへ、冷暖を自知し、痛癢を了知す。（中略）物は去来し、境は生滅すれども、霊知はつねにありて不変なり（中略）昭昭霊霊としてある、これを覚者智者の性といふ。これをほとけともいひ、さとりとも称す[11]

と述べられるように、心の主体としての常住なる霊知をもって悟りの対象ともし、悟る主体としての仏ともする先尼外道同様の見解に陥ってしまう、ということになる。つまりこの部分では、こころそのままを仏とすることは否定されてはいるが、所謂こころが妄心として否定されている、ということにはならないであろう。そして後には、為山と仰山の因縁における句を引きながら、

古徳云、作麼生是妙浄明心、山河大地日月星辰。
あきらかにしりぬ、心とは山河大地なり、日月星辰なり。しかあれども、この道取するところ、すすめば不足あり、しりぞくればあまれり（中略）四大五蘊心は、四大五蘊のみなり。さらに馬なし、猿なし[12]

とも述べられており、古徳の証されたところでは、四大所造とされる自分の身心において煩悩を離れた心はこの四大所造の身心であって、その内にも外にもない、とされていることが知られよう。そして、

しかあればすなはち、即心是仏とは、発心・修行・菩提・涅槃の諸仏なり。（中略）しかあるを、長劫に修行作仏するは即心是仏にあらずといふは、即心是仏をいまだ見ざるなり、いまだしらざるなり、いまだ学せざるなり。[13]

と示されており、「心」としての身心で長劫に渡って修行し作仏し続けて行くのが「即心是仏」、つまりこの「心」が仏である、ということの意味だと説示されている、と考えるべきであろう。

角田氏の用いられた言葉を借りてこれを纏めるならば、本証とは仏祖による尽界尽時が「心」であるとの証明である、よって衆生の身心は「心」である、衆生の身心での修行が諸仏の修行と変わらない妙修である、と以上のようになる。

そうすると、角田氏の心解釈で禅師の「心」は、身心の内の心だけに眼られており、さらにその心を真・妄に二分した上での真心の発現したものとなっているのに対し、筆者は禅師の「心」が、一如である身心あるいは依正二報の現成し続けている姿のことをさしていると解釈することになり、この点で異なることになるのである。角田氏の立場では衆生の慮知心は「心」から除外されるが、筆者の立場では衆生の慮知心を含めて「心」であるということになる。つまり〝発心以

前の衆生の慮知心は「心」であるか〃これを問題としようということである。（補注）

2、「発無上心」巻と「発菩提心」巻

ところで、冒頭でも述べた通り、当面の課題は「発無上心」巻と「発菩提心」巻との比較である訳だが、この慮知心の問題がその比較の為に必要となる理由を以下に述べておこう。

「発無上心」巻における木石心は「尽界の心」であり、当然そこには衆生の身心も含まれ、木石もこの「心」である、と縷々「心」の説明をされ、そののち、

かくのごとくなるを拈来して、坐禅し作仏するを、発心と称す。[14]

と述べられ、「心」としての衆生が菩提心をおこすとされ、そうであるから誰であれ、いついかなる時でも発心しうることがのべられていた。一方「発菩提心」巻では慮知心・草木心・積聚精要心の内、菩提心をおこすのは慮知心ではあるが、[15]発心以後には尽界も菩提心となることが述べられていた。

以上のことから、木石心と慮知心とは同じものを指しているのではないか、との考えを述べた。しかし発表後様々なご教示を頂き、それだけでは発心以前の慮知心と木石心とが同じだとは言えないことに気付かせて頂いた。というのは、「発菩提心」巻に示される菩提心が「発無上心」巻で説かれる菩提心と同じであるから、それをおこすとされる心も同じであるとは、必ずしも言えないからである。そこで、〃発心以前の衆生の慮知心は「心」であるか〃あるいはそうでないのか、確認されなければならないのである。

三、方法と対象

次にこれについての見通しと、確認の方法を述べよう。

先ず発菩提心巻では、その冒頭に、

おほよそ、心三種あり。
一者質多心、此方称慮知心。
二者汗栗多心、此方称草木心。
三者矣栗駄心、此方称積聚精要心。

このなかに、菩提心をおこすこと、かならず慮知心をもちゐる。菩提は天竺の音、ここには道といふ。質多は天竺の音、ここには慮知心といふ。この慮知心にあらざれば、菩提心をおこすことあたわず。この心をすなはち菩提心とするにはあらず、この慮知心をもて菩提心をおこすなり中略しかあれども、愛応道交するところに、発菩提心するなり。[16]（傍線筆者）

と述べられている。

慮知心以外の心は菩提心をおこせないこと、この心そのままを菩提心とはしないことが明言されており、やはり発心以前には尽界尽時を指す「心」とは異なっているかのように思われる。

ところで、この三種の心は、「身心学道」巻でも取り上げ

られており、そこでの説示をみると、

仏道を学習するに、しばらくふたつあり。いはゆる心をもて学し、身をもて学するなり。心をもて学するとは、あらゆる諸心をもて学するなり。その諸心といふは、質多心・汗栗多心・矣栗駄心等也。又、感応道交して、菩提心をおこしてのち、仏祖の大道に帰依し、発菩提心の行李を習学するなり。たとひいまだ真実の菩提心おこらずといふとも、さきに菩提心をおこせりし仏祖の法をならふべし[17]

とある。「発菩提心」巻は十二巻本に、「身心学道」巻は七十五巻本にそれぞれ属しているから、本稿の性格上「身心学道」巻の説示内容をもって「発菩提心」巻の内容を決めることはできないであろうが、比較することは許されるであろう。

「身心学道」巻において仏道を学ぶ「心」とは諸々の心であり、それらは質多心・汗栗多心・矣栗駄心等だとされている。そして感応道交して発心するということであるが、この説示の下敷きとなっていると思われる『摩訶止観』の記述に従ってこの諸々の心の内、質多心（すなわち慮知心）で発心すると考えるべきであろう。[17] そうすると発心以前の慮知心も心であり、その慮知心で発心し、以後「心」全体で仏道を学んで行くのである。

一方の「発菩提心」巻では、三種の心の内、慮知心以外の二つの心は仏道には無関係のように読むこともできようが「おほよそ、心三種あり。一者質多心、此方称慮知心。二者汗栗多心、此方称草木心。三者矣栗駄心、此方称積聚精要心。」との一節が、仏道を学ぶ「心」が質多心・汗栗多心・矣栗駄心と三様に説かれることを説くものと解釈できるならば、発心以後は尽界が菩提心となると示されていることは先述した拙稿で確認しておいたから、この二つの巻の記述は、同じことを述べている、つまり発心以前にも慮知心は心であることを認めていると理解して差し支えないのではないか、との見通しをもつことができる。

次に「発無上心」巻だが、この巻では「尽界の心」としての身心で発心することが述べられる、と理解することは正しいのか、正しいとすればそれは七十五巻本の中でも異質な説示であるのか。

先に述べたとおり、「即心是仏」巻でも同様な説示があると見たのであるが、さらに今挙げた「身心学道」巻でも事情は同じであると考える。

たとひいまだ真実の菩提心おこらずといふとも、さきに菩提心をおこせりし仏祖の法をならふべし。[19]

これをみると、発心以前の心でも仏祖の法をならふことはできることがはっきりとしている。角田氏が述べられるように、発心以前の慮知心が否定されるだけのものであるならば、そのようなこともありえないであろうから、やはり衆生の慮知心が仏道に入り得るものとしてある「心」だと考える

方が適当であろうと思われ、「発無上心」巻における説示は、他の巻においても説かれるところであろう、と見通せる。

ところで、石島尚雄氏は『身心学道』の心と身について――特に「尽十方界真実人体」と「色身不二」との関連性をめぐって――[20]」と題するご論文を発表され、結論を自ら次の四点に纏められておられる。

一、「心学道」の「心」は、「山河大地日月星辰」で象徴されているところの「全宇宙」である。

二、「身学道」の「身」は、「尽十方界」とよばれるところの「全宇宙」である。

三、「身心学道」という題名は、天台教学の「色心不二」ということを踏えている。

四、道元禅師の「身心」に学道の裏づけとしての位置付けがなされている。この点が単に「尽十方界真実人体」とか「色心不二」と述べられている原理の説明に留まる立場と違うところである。

このご論文で氏は、心が「尽十方界」であり、身が「尽十方界」であり一如だとされるのは、自己の身心が修行の裏付けとなることを示されるとこに主眼があるとみられていると思われる。この時所謂こころを「心」から除外すると、衆生は発心し修行してゆく裏付けを失うことになろう。

筆者も発心を扱うこのこつの巻で、衆生のこころは「心」だとされていると考える。

以上が見通しである。次にこの確認の方法を述べる。

「発無上心」巻については、七十五巻本の他の巻において、発心以前の慮知心がどのように扱われているかを確かめ、それが「発無上心」巻における説示と一致すれば、「心」に関して、この巻と他の巻との一致と、この巻の解釈が正しいことが分かるであろう。「発菩提心」巻についても同様に、他の巻での発心以前の慮知心を確認できれば、以下類推できるであろう。

いづれにしても、発心以前の慮知心を持つ者、つまり衆生が如何に扱われているかが明らかになれば良いから、七十五巻本の巻における衆生の扱い、十二巻本の巻々における衆生の扱いをそれぞれ確認できれば良いであろうと考える。

四、「仏性」巻における〝衆生〟の語について

さて、〝衆生〟の語がみられる巻のうち、初めに取り上げようとしたのが、表題に掲げた通り「仏性」巻である、この巻は、古来重要視されてきた巻でもあり、一般に仏と衆生とを結ぶ心性と考えられている仏性を取り上げ、説示されている巻であるから、初めに取り上げるに相応しいのではないかと考えたからである。

以下「仏性」巻における「衆生」の語をめぐって考えたことを述べるが、はじめにも述べた通り結論にまでは至っておらず、あくまで途中経過の報告に過ぎない。今後もできる限

り考えて行く所存であり、ひろくご教示を頂ければ幸いである。

先ず冒頭は『涅槃経』における「一切衆生、悉有仏性」との句を引き、これが釈尊のみならず、一切の仏祖が参学し住持してきたことを述べられる。つまり、以下禅師がこの巻で述べられることは仏祖の所証であると宣言されていると考えられる。これに引き続いて、

> 世尊道の一切衆生悉有仏性は、その宗旨いかむ。是什麼物恁麼来の道転法輪なり。あるいは衆生といひ、有情といひ、群類といふ。悉有の言は、衆生なり、群有也。すなはち悉有は仏性なり、悉有の一悉を衆生といふ。正当恁麼時は、衆生の内外すなはち仏性の悉有なり。（中略）悉有の言、さらに始有にあらず、本有にあらず、妙有等にあらず。いはんや縁有・妄有ならんや。心・境・性・相にかかわれず。しかあればすなはち、衆生悉有の依正、しかしながら業増上力にあらず、妄縁起にあらず、法爾にあらず、神通修證にあらず。（傍線筆者）[21]

と述べられる。「何者かがこのようにしてある」と言うように、世界の内で衆生と言われるものはこれと限定できず、衆生とはその内・外を問わず総てであって、それが悉有と表現され、それが仏性といわれる、これが「一切衆生、悉有仏性」の句の宗旨だと説示されている。そして、そのような仏性とはある時点以降から具えるとか、生まれながらに具えているなど、過去様々になされてきたどのような説明によるとしても、衆生がその中に仏性を具えているということは正しくないとされる。ここで注目したいのは傍線を引いた部分であり、衆生の依正二報は修行によって習得される神通力によって現されるもの、つまり修証によってそのようなありかたになるものではないことを言われるのだ、と思われる。

また、他の巻同様、仏性理解の誤りを種々具体的な例を挙げて示される中に、

> 仏性の言をきゝて、学者おほく先尼外道の我のごとく邪計せり[22]

とあるように先に見た意味での衆生の捉え方に背いて、衆生の慮知心だけを取り上げそこにその主体としての〝我〟のようなものを仏性とすることが挙げられている。衆生についてのこのような理解は「邪計」とされているのである。そうすると、衆生の慮知心もそれ以外のもの同様仏性であり、特別に区別されないが、その中に我のようなものを想定しそれのみを仏性だと考えると仏祖の所証に背くことになり否定されるのである。これは先に「即心是仏」巻を取り上げて見たところと一致する。

次に、「それが仏性である」ということが「それが『心』である」ということと同じであれば、〝発心以前の衆生の慮知心は「心」であるか〟という問題にも答えられるかと思われる。これについては、塩官斉安の語としての「一切衆生有仏性」の句を拈提される一節が参考になろう。そこには、

いま仏道にいふ一切衆生は、有心者みな衆生なり、心是衆生なるがゆへに。無心者おなじく衆生なるべし、衆生是心なるがゆえに。しかあれば、心みなこれ衆生なり、衆生みなこれ有仏性なり。草木国土これ心なり。心なるがゆへに衆生なり、衆生なるがゆへに有仏性なり。日月星辰これ心なり。心なるがゆへに衆生なり、衆生なるがゆへに有仏性なり。国師の道取する有仏性、それかくのごとし。[23]

とある。「有心者」と「無心者」、「心是衆生」と「衆生是心」などは「心」と衆生とが同じであることを強調される論法であろう。ここでも所謂衆生の外に、「草木国土」・「日月星辰」なども「心」であり、それゆえに衆生であるとのべられ、その衆生が「有仏性」、つまり仏性であるとしめされている。このように理解することが、正しければ「心」であることと「仏性」であることは同じと要られ、やはり〝前の衆生の慮知心は「心」である〟と言えるのではなかろうか。

しかし、この巻は非常に難解であり本文解釈もさらに詳細な検討が必要と思われ、あくまでこのような方向でさらに考察を進めてゆきたいという見通しを、途中経過の報告として述べるにとどまらざるをえない。

五、まとめ

以上を纏めておこう。

1、問題の所在

発心以前の衆生の慮知心は「心」であるか、という問題を取り上げ、「発無上心」巻と「発菩提心」巻において菩提心をおこす「心」をさらに比較すること、それについてはどちらも同じく「心」ではないか、との見通しを持っていること。

2、方法と対象

「発無上心」巻を含む七十五巻本の他の巻、「発菩提心」巻を含む十二巻本の他の巻において衆生の慮知心がどのように扱われているか、確認することによってその見通しが検証できると考え、衆生の語が見られる他の巻を調査すること。

そして当面の対象として「仏性」巻を取り上げて行くこと。

3、「仏性」巻における〝衆生〟の語について「仏生」巻でも、衆生の身心は「心」とされており、従って慮知心も「心」と考えなければならないであろう、との見通しを得たこと。

以上のようになる。

最後に、御教示を賜った多くの方々、また本稿執筆の機会を与えて下さった先生方に感謝申し上げ、結びとしたい。

注

（1）『宗学研究』三五（一九九三年三月）及び『駒沢大学大学院仏教学研究会年報』二六（一九九三年五月）所収。
（2）『駒沢大学仏教学部論集』一六（昭和六〇年十月）。
（3）前注（2）論文三八四頁、傍線筆者。
（4）前注（2）論文三八三頁。
（5）『道元禅師全集』上（大久保道舟編、筑摩書房刊）三五九頁。以下同書は『全集』上と略す。
（6）昭和三十八年四月、禅学研究会刊、一〇一頁。
（7）『宗学研究』二六（昭和五九年三月）。
（8）前注（2）論文、三八五頁。
（9）前注（2）論文、三九〇頁。
（10）「即心是仏」巻（『全集』上四二頁）
（11）同巻（『全集』上四二～三頁）
（12）同巻（『全集』上四四頁）
（13）同巻（『全集』上四五頁）
（14）「発無上心」巻（『全集』上、五二五頁）
（15）前注（1）拙稿を参照されたい。
（16）「発菩提心」巻（『全集』上、六四五頁）
（17）『全集』上三六頁。
（18）大正蔵四六巻、四頁上。
（19）「身心学道」巻（『全集』上三六頁）。
（20）『駒沢大学大学院仏教学研究会年報』一七（昭和五九年二月）。
（21）「仏性」巻（『全集』上一四頁）。
（22）同巻（『全集』上一五頁）。
（23）同巻（『全集』上一七頁）。

（補注） 角田氏の論文でも注意されていたことだが、発表後改めて氏より、慮知心をも「心」とするような考え方は安易な現実肯定に陥り、自然外道の説と変わらなくなるのではないか、との御指摘を頂いた。しかし、「現成」とはひとつの固定的な心源による現象の現れではなく、無常なる身心の縁起することであることは、本学教授、河村孝道氏が夙に指摘されており（「無常仏性の考察」『印仏』一三・二、一九六五、三）、慮知心をもつ衆生の身心の現成という考え方は因果を否定する自然外道の説とはならないであろうと思われる。身心の現成することが「心」であるからこそ、誰であれ衆生が発心し修証して行けることを禅師は示されているのではないかと考える。氏の貴重なご教示を受け今後さらに考察して行ければ、と考えている。氏には改めて感謝申し上げる次第である。